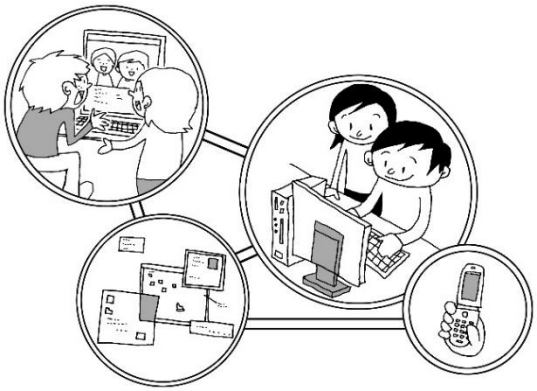
学校だより
10月
かわい
令和３年１０月４日
http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/kawai/

賢人は慣れない

校長　窪田　剛久

９月中は緊急事態宣言延長に伴い、分散登校を続けてきました。人数が少ない中での学校生活となり、子ども達は静かに落ち着いて学習や活動に取り組んでいるように見えました。ただこれは本来の姿ではありません。本日の全員登校再開に伴い、子ども達はたくさんの友達と久しぶりに再会し、笑顔を見せていました。今後、本来の明るく活気に満ちた「かわいっ子」の姿に、少しずつ戻っていくことを期待しています。



９月の分散登校期間に飛躍的に向上したことがあります。それは、子ども達と先生方の一人一台端末の活用技術です。職員室には日々「ミートが…」「ロイロの…」など、タブレットをいかに授業に生かすかについての話題があふれています。５年間で計画されていたGIGAスクール構想を１年間で急速に実現に向かわせるという方向に舵を切った政策です。現場では何とかその政策に追い付こうと必死になり、タブレットを日常的に活用していこうとしています。そんな折、非常に残念で悲しい報道が耳に入りました。報道での情報しか分かりませんが、かなり以前からタブレットを導入していた学校で起きたことのようです。子ども達がタブレットを扱うことが常態化した中で、「慣れ」が油断を生んだのかもしれません。本校としましてもタブレット使用に当たっての約束を確認するとともに、タブレット使用以前に人としてどう生きるべきか、どのように人と接したらいいのかといった人権教育にも力を入れていかなければならないと思いました。保護者、地域の皆様にも今一度子ども達の様子をしっかり見守っていただきたく、ご協力をお願いしたいと思います。

さて、「ライオンキング」などで知られる日本最大の演劇集団『劇団四季』は皆様ご存じだと思います。そんな劇団四季の稽古場や舞台裏に掲げられている標語があります。

「慣れだれ崩れ」

これは劇団員に対する戒めの言葉で、劇団四季の創立者であり演出家の浅利慶太氏の教えだそうです。同じことを繰り返していると、人間には知らず知らずのうちに「慣れ」が生じてきます。 それはやがて「だれ」になり、「崩れ」を生み出す。そうならないために、技術を磨き続ける信念を貫きましょうと教えています。一流のステージを生み出し続ける劇団四季、その理念を象徴する言葉なのだと思いました。賢人は決して慣れません。目の前の状況に慢心することなく、常に実情を見つめなおす視点の大切さを教えてくれています。

新型コロナウイルスの第５波が猛威を振るったこの夏でしたが、感染状況が減少に転じてしばらくたちます。報道では、４回目の緊急事態宣言で「慣れてしまった…」といった声が聞こえてきました。しかしよく考えると減少傾向にあるとしても、感染者数は以前高い水準であり、日々積みあがっています。医療体制のひっ迫は続き、自宅療養者や入院調整をされている方々もたくさんいらっしゃいます。こうした状況を冷静に理解し、警鐘を鳴らしている緊急事態宣言や、感染症の流行に慣れてしまってはいけないのだと思います。

一人一台端末や感染症など、子ども達を取り巻く環境は日々変わっていきます。その変化に迅速に反応しつつ、状況に慣れることなくリスクを見出し、対策を講じていく。こうした積み重ねが子ども達や私達自信を守ることに繋がっていきます。賢人が教えてくれたことを胸に、職員一同アンテナを高く張っていこうと思います。保護者、地域の皆様におかれましても、何かお気づきの点がございましたら、遠慮なく学校までご連絡いただきたいと思います。ご協力、よろしくお願いいたします。